

世界に認められた 研究者たち —AJAEへの道—

食料領域研究員

川崎 賢太郎

AJAE。この四文字に羨望と畏敬の念を抱く農業経済学者は少なくない。学術雑誌『American Journal of Agricultural Economics』の略称である。

研究者の業績は主に論文によって評価される。そこで重要となるのは、論文がどの雑誌に掲載されたかということである。一口に学術雑誌と言っても、その質は千差万別だが、国際的に普及している数ある農経専門誌の中、最高峰と目されているのがAJAEである。

そこに自らの名を刻むことは多くの研究者が抱く夢であるが、こと日本人に関して言えば、それは夢というより、夢のまた夢と言った方が正確かもしれない。1968年の発刊⁽¹⁾から2009年までの40年余りに約3千本の論文⁽²⁾がAJAEに掲載される中、筆頭著者として掲載の栄誉を与えられた日本人はわずか25名、論文数にして延べ36本に過ぎない⁽³⁾。

国内読者への発信が優先されるべき研究や言語上の障壁もあるため一概には言えないが、日本農業経済学会の会員が単年度ベースで千人を超えるのに比べると、この数字はやはり寂しい。如何にすれば世界の第一線で認められる日本人を増やせるのか、25名の経歴を可能な限り調べ、そのヒントを考察した。

まず筆頭著者としてAJAEに初めて掲載された時点での博士号の取得状況だが、国外での取得者16名、国内取得者4名、未取得3名、不明2名である。経済学の本場アメリカへの留学組が圧倒的に多い。更に国内組と未取得の計7名のうち実に6名までもが、既にAJAE掲載経験を持つ者との共著という形でAJAEデビューを果たしている。これらが示唆するのは優れた指導者⁽⁴⁾や共著者の存在である。新規性を強く問うAJ

AEでは、新たな理論や方法論等、学問に進化をもたらす論文でなければ審査に通りにくい。学問に進化をもたらすためには、学問の最先端を知り尽くし、今後進むべき方向を見通せる者から、指導や助言を受けることが一番の近道である。

続いて初掲載時の年齢（生年不詳の8名は学部卒業時点を22歳と仮定して算出）は、30代前半10名、30代後半10名、40代2名、不明3名である。最年少30歳、最高45歳、平均34.6歳で、博士号取得から平均4.0年経過後である。また一人あたりの掲載回数は、速水佑次郎氏の7回という大記録を除けば1回ないし2回に留まっており、（今後増える可能性もあるが）何度も掲載できるわけでもないようである。ノーベル賞につながった業績は30代、40代前半に行われた研究が多いことが知られているが、そうした年齢と業績ピークの関係は農経分野でも成立すると言えよう⁽⁵⁾。

以上の簡単な観察から、若いうちに経験豊富な研究者と十分に交流しておくことが、AJAEへの近道と推察される。国際的なトップジャーナルへの論文掲載は、研究者や論文の資質を証明するだけでなく、中長期的には所属機関や国家の発言力・威信にもつながりうる。25名の

うち、掲載時点で我が政策研の前身である農業総合研究所出身だった者は6名いるが、2001年に政策研へと改組して以来、政策研出身者による掲載は果たされていない。いつの日か我が研究所の名がAJAE紙面を飾り、世界に認められる日が来ることを願って筆をおく。

注(1) AJAEの前身である『Journal of Farm Economics』も始める。一世紀近い歴史を持つ。

(2) 本稿での「論文」には、proceeding paper、book review、commentやreplyを含めない。

(3) 日本人の姓が否かを基準に、筆者がカウントした。よって日本人離れた姓の持ち主等、見落しの可能性もあることを御容赦願いたい。Web of Scienceによれば、研究機関の国籍で圧倒的に多いのは米国で88.0%。これにカナダ（4.6%）、豪州（2.5%）等が続く。日本は0.8位（0.8%）である。

(4) これは日本人に限らずである。Hilmer and Hilmer, 2007. "On the Relationship between the Student-Advisor Match and Early Career Research Productivity for Agricultural and Resource Economics Ph.D.s" AJAE, 89, 162-175.

(5) 農業経済学に限定しなければ、よりランクの高い雑誌は存在する。従ってAJAEを卒業し、更に上の雑誌を目指している可能性もあるが、25名の業績を眺める限り、そうした傾向は必ずしも顕著でない。